

# 書き下ろし補助学習材による学習意欲を喚起するための いくつかのこころみ

近 松 成 仁

## 一、はじめに

私は今までに、授業の副次的な学習材として、教科書の作品など主要な学習材とは別に私自身が文章を書いて生徒に提示したことがあった。「手びき」と呼ぶにはやや自立的なこれらの文章を活用して、生徒の学習意欲を喚起し主体的な学びへ誘うことができないかという試みが今回の報告である。ここ六年ほどの間に作成した「書き下ろし補助学習材」を用いて行った試みを報告させていただく。

## 二、文学教育の実践の中で

「山月記」の学習の中で、生徒一人ひとりを自分の内なる李徴と向かい合わせる契機になればと思い、「山月記」をバスターシーシュ（模倣）して「蒼月記」という文章を書いた。私自身と李徴とを重ね、詩作を国語教育研究に置き換えて書いたものである。二〇〇六年（平成十八）年に第一校を書き上げて生徒に提示し、その後も二年

生の「現代文」の授業を担当し、「山月記」の授業をするたびに手を加えつつ活用してきた。最初は、授業で「山月記」の段落をひとつ終えるたびに対応する「蒼月記」を書いては教室の掲示板に貼って示していた。その後の年度では、冒頭部分だけ全員に印刷して配布し、残りの文章は読みたい者にだけ渡すようにするなど提示方法を模索していった。愛知県立津島東高校に勤務していた二〇一〇（平成二二）年度には、語彙指導のためのワークシートという体裁に仕立て直した。その中から、「臆病な自尊心」「尊大な羞恥心」というキーワードがでてくる場面に対応する文章と、李徴の即興の詩の「訳」を掲げておく。詩の「訳」については、「蒼月記」の中に書いた原詩とほとんど結びつかないものと、原詩を翻案し別の印刷物で示したものとを掲げる。なお、「蒼月記」の中では袁傜を「Mさん」という、「おれ」（＝近松）の旧知の女性として造形した。

おれは国語教育学の研究によって世間から尊敬されようと思  
いながら、進んで先輩教師の指導を受けたり授業を見学させて  
もらったりすることはなかった。また、同世代の青年教師たち

と勉強し合うこともなかった。自分の存在をアピールし、世間の耳目を集めるために学会で実践発表をすることを好んだが、その発表内容がじつは虚飾によって極度に美化されていることを知られることを恐れ、自分の授業を公開することを頑なに拒んだ。すべて臆病な自尊心と尊大な羞恥心という、修飾語と被修飾語がねじれた我が心性のせいである。自分に才能がないことを薄々感じながらもそれを自分で認めることを惧れるがゆえに、あえて自分を磨くことをしなかった。また、自分には才能があることを信じたいと願うために、同僚と同じ土俵で論じ合うことを注意深く忌避してきた。おれはしだいに世間と離れ、職員室の中でも孤立し、胸に渦巻く自分の心よりも大きな怒りに身悶えすることによって、ますます己の内なる臆病な自尊心を飼い太らせる結果になった。よく言われることだが、人間は誰でも自分の性格という自分の意のままにならない猛獣を自分の心の中に飼っているのだろう。おれのばあい、この臆病な自尊心が我が心の猛獣だったのだ。虎だったのだ。これがおれ自身を食い破り、周囲の人々を踏みにじり、果てはおれの姿をかくのごとく、内心にふさわしい恐ろしくあざましいものに変えてしまったのだ。今思えば、全く、おれは、おれの持っていたほんのわずかな才能をみすみすドブに捨ててしまったわけだ。「国語教育とは、言語能力の伸長とともに芸術に対する感性を涵養することで人格の完成をも目指すべきである」などと実践の伴わないキザな空論を弄びながら、事実は、キレ者の仮面を付けてはいるがほんとうの才能がないことがばれるかもしれないという卑怯なおそれと、日々の

地道な努力によって一歩一歩高みに登っていくことを面倒がる怠け心がおれのすべてだったのだ。おれよりもはるかに乏しい才能でありながら、それを一心に磨き謙虚に研究対象に向かったために、堂々たる実践家・研究者になった者がいくらでもいるのだ。虎となり果てた今、おれはようやくそれに気づいた。認めたくないものだ、愚かな自惚れゆえの自らの過ちというものは。

### 【「蒼月記」の中に記したもの】

まずは幽玄ゆうげんにして知的な新古今調に

溪山せきざんに 月影清く 照らしたり 青く明けゆく 東雲しののめの空

同じ景を今度は古今調に

溪山せきざんに 荒ぶる咆吼ほうこう 響きけり 明月つき冴えて 秋の風吹く

さらに君への思いをもう一度古今調で

年を経て 君と会ひたる この朝あした 昔の君は

美少女なりき

君と学んだころ国語の教科書によく載っていた寺山修司ふう

陽ひの中に 制服姿で 駆けてゆく 乙女の君を 我は忘れず

おれや君と同年代の歌人、俵万智ちゃんふう

虎になった 今の苦しみ 分かってよ 昔はおたがい

輝いてたね

【翻案し別に印刷して提示したもの】

ちかまぢっく 訳

何の前触れもなく、狂気はおれに取りついて、おれを獣にしてしまった。ある日、突然。  
不幸は不幸を呼び、負のスパイラルの檻かぎにおれは閉じ込められていく。

数知れない肉を引き裂き、夥しい血を吸ったこの爪と牙に向かってくる者など、今ではいなくなってしまった。  
しかし、友よ。思い出すではないか。東の袁俊、西の李徴と呼ばれた若かりし日々を。

確かにそんなころもあった。  
けれど、時間が流れる歯車はどこで狂い始めたのだろう。おれは人々から恐れられる人喰い虎として野に身を潜め、君は人々の尊敬を受けて人生の成功者になった。

おれの転落はどこから始まったのであろうか。たまたま友と再会し自分の半生を振り返るとき、

持っていくところのない怒りと後悔に身を灼かれる。

そんな気持ちに詩に叩きつけ、

聳え立つ山と深い谷を煌々こうこうと照らしているあの月に向かつて訴えようとしても、

おれの喉からは虎の吼える声しか出ないのだ。

呪わしい獣の咆哮ほうぼうが響き渡るだけなのだ。

直線の傍線を付した部分は中島敦の本文中の語彙を易しく言い換えた箇所である。もともとなっている原作中の語彙を見つけさせることを作業として課した。波線の傍線を付した箇所は、生徒たちの好むアニメーションなどを下敷きにした表現である。生徒の興味を引くためと文章のスパイスとなるように織り込んだが、国語の力を伸ばすためには大きな意味はない。生徒は熱心に読んで、作業に取り組んでくれた。けれども当初のねらいどおり自身の内なる虎に気づく契機となったかは肯定できる手応えではなかった。即興の詩の「訳」について、詳しくは次節の古典の「訳」でその目的などを述べたい。

この年には、全校生徒が集まる朝会で、「人間の本質のひとつは物語ると言うことで、そういう意味では人間を『ホモ・モノガタリ』ととらえることができるのではないか。そして、人間が受け容れ難い現実を受け容れるために作った装置が『物語』ではないか」という講話を行った。河合隼雄と村上春樹の対談集（『村上春樹、河合隼雄に会いに行く』新潮文庫）の中で語られている、「小説を書くのは自己治療的な行為である」という発言に基づいて考えたのが「ホモ・モノガタリス」であるが、私自身もこの「蒼月記」とい

う「物語」を書きながら自分を癒していたのかも知れない。

### 三、古典教育の実践の中で

古典の授業においては、原文をそのまま現代語に移し換えたり文法を学んだりするだけでは理解できない雰囲気や現実味を味わわせるために、本文にかなり加筆し状況も強引に具体的に設定した「訳」を単元の終わりに配布し、指導者が読み上げた。このような「訳」を作るヒントになったのは、橋本治「窠麥源氏物語」、俵万智『恋する「伊勢物語」』、田中貞子「検定絶対不合格教科書古文」である。はじめに、「宇治拾遺物語」の中の「児のそら寝」と呼ばれる一節の「訳」の中から一部を掲載する。これは昨年度（平成二二年度）に作成して津島東高校で「国語総合」の授業で活用したもので、本年度は愛知県立西春高校の一年生に「国語総合」の授業の中で印刷したものを配布し、指導者が読み上げた。

じつさいに寺で過ごしてみると、その実態は、エリート育成機関としての役割にとどまらない、奇妙なものであった。とくに驚いたことは、私のような「ちご」と呼ばれる者に注がれる僧たちの視線である。確かに経文などに関する僧たちの造詣は想像以上に深いし、仏道を究めんとする彼らの情熱は並大抵のものではない。けれども彼らとて所詮は男である。厳しい修行でそれを解脱しようとしても、生物としての本能的な欲求まで完全に消し去ることはできぬ。女性が全くいない世界の中で、彼

らの本能的な欲求は、おのずと私のような少年に向けられていった。とりわけ、容貌が整い、かつ、まだ男として開花しきっていない微妙な年齢にある者に特有の麝香のような匂いに対して、彼らの嗅覚はことさら鋭敏であった。僧たちは夜ごとに少年たちを寢所に誘った。少年たちにとつても、それが刺激の少ない生活を潤す密かな楽しみになっていた。

そのような生活の一部を示すエピソードを一つ、紹介する。これも今となつてはもう昔のことだ。自分の体験として書き記すのははばかられるので、三人称で書くことにする。延暦寺にひとりの「ちご」がいた。それが私であるかどうかの詮索はご容赦願いたい。確か、冬眠していた虫たちも目覚め始めるという啓蟄を過ぎた春のなまめかしい夕暮れのことだった。光源氏が「世の中の過ちはするぞかし」とつぶやいた頃も、このような刻限だろう（そのあと源氏は初対面の朧月夜の君と強引にちぎってしまふのだが）。千金に値するそんな宵、僧たちは長くなり始めた夜の退屈さに、「こんな夜は、ちよつと羽目をはずそうじゃないか。いつも指導してくださる先生方も今日は東塔の根本中堂に行ってしまった。せつかくだから、さあ、ぼた餅でも作ろう。正月に入ってきたあの「ちご」も、親が作ってくれたぼた餅を懐かしんでいたようだし」などと話し出した。

太いフォントで書いた部分は、対応する本文があることを示している。この「訳」では「児」の寺の中での位置や役割を書き加えた。

本年度の一年生には、「国語総合」において、この「兎のそら寝」のあとに同じく「宇治拾遺物語」から「検非違使忠明のこと」と呼ばれる文章の指導をした。その本文のすべてと、「訳」のうち、本文に傍線を付した箇所に対応する部分を掲げる。

本文

今は昔、忠明といふ検非違使ありけり。それが若かりけるとき、清水の橋のたもとで京童部きやうわらべどもといさかひをしけり。京童部手ごとに刀を抜きて、忠明をたち込めて、殺さむとしければ、忠明も太刀を抜きて、御堂さまに上るに、御堂の東のつまにもあまた立ちて向かひ合ひたれば、内へ逃げて、部のもとをわきに挟みて、前の谷へ躍り落つ。部、風にしぶかれて、谷の底に鳥のゐるように、やをら落ちにければ、そこより逃げて往にけり。

京童部ども谷を見下ろして、あさましがり、立ち並みて見けれども、すべきやうなくて、やみにけりとなむ。

訳

このまま舞台を東へ突つ切れば、音羽の滝へ降りる階段があるはずである。そちらへ走りだすと、自分の真正面、本堂の東の端キンバに金髪キンバのモヒカン頭が見えた。その後ろにはガムをクチャクチャいわせながら薄ら笑いを浮かべた牛鬼ウシオニがいる。その他の連中も大勢立ちはだかつてこちらに向かい合っていた。自分の行動を完全に読まれ、先回りされたのである。振り返ると牛頭丸ウシガタマらが舞台

上がってきたところであった。東には牛鬼ウシオニと馬頭丸ウマガタマ、西には牛頭丸ウシガタマと子分たち、北は人間の壁、南は校舎の三階に匹敵する断崖である。命運は尽きたかに見えた。死を覚悟したその一瞬「生きねばならぬ」という叫びを爛明は聞いたような気がした。守らねばならないものができたとき、男は、強くなる。爛明は北（建物の中のほう）に向かつて走ると、拝殿と舞台との間で開け放たれていた部の下半分をむんずとつかんで引きちぎるように取り外すやいなや、きびすを返し、外した部を脇の下に挟んで南に広がる前の谷に飛び落ちた。

（註…人物造形に当たりバーンスタイン「ウエスト・サイド物語」、椎橋寛「ぬらりひよんの孫」を参考にした。）

この「訳」では、清水の舞台から飛び降りざるをえなかった必然性と緊迫した状況が伝わりやすいように、本文には登場しない忠明以外の人物も作って書いてみた。冒険活劇であるとともに、登場人物の造形に当たっては生徒の世代に読まれている漫画の登場人物を参考にしたので、単元の学習の終わりに印刷したものを配布し読み上げると、ところどころで笑い声も起こった。生徒の評判はよかった。どちらの「訳」でも太字のフォントで強調した表現に対応する語句を本文中から見つけておくことを指示したが、そのための時間を授業中には確保せず、自主学習にゆだねてしまった。私自身がこの「訳」の教育的効能を信じ切れなかったからである。

本年度の一年生の夏季休業中の補習では、「徒然草」の一八八段「ある者、子を法師になして」の終末部分を指導し、それに基づく

「訳」を印刷して配布し、読み上げた。その一部を掲げる。傍線部は、対応する本文がある表現である。

ある者が「そのススキのことなら渡し場の辺りに住んでいる聖者が知っているんじゃないかな」と言う。するとそれまで黙したまま双方の主張を聞いていた西春寺の住職 Priest Tolerance（日本語表記は登蓮法師）がすくくと立ち上がっていった。「蓑、笠をお持ちではありませんか。もしお持ちでしたらどうぞお貸しください。そのススキについて教えてもらいに渡し場の辺りの聖者のところに訪ねていこうと思います。」この Priest Tolerance は普段は温厚な知識人で知られた人であるが、自分がいったん決めるとテコでも動かない人であった。人々は Priest Tolerance に向かつて、「いくらなんでも余りに急すぎますよ。こんなすばらしい法会が終わったばかりなのに。せめて雨がやんでから行かれたほうが」と引き留めるが彼はいつものように後に引かない。Harry Potter のようなロイド眼鏡の奥から真剣そのもののまなざしで見つめながらこう言った。「雨がやむまで待てとは、これはまたとんでもないことをおっしゃいますな。人の寿命が尽きるタイミングは、雨の晴れ間が訪れるまで待つてくれるとおっしゃるのですか。時間の流れというものは人間の思いや都合を超えたものでしょう。天と地が分かれて世界ができてから今までずっとそうだったし、これからもゆく河の流れのように滔々とたつと流れ続けていくものでしょう。そして悠久の大地は、私たちの泣き笑いを、私の名のように寛容とらに受け止めてくれるでしょう。雨が上がるの

を待つている間に私が死んだりその聖者が亡くなってしまったら、ススキのことを尋ねるなど二度とできません。本当のことを知っている人がこの世にいなくなってしまうのです。そうやってしまったら真実は永久に分からなくなってしまう。ことは一刻を争うのです。それなのに雨がやむのをのんびり待っているなど、あまりに悠長に過ぎるというものです。」とだけ言うと、雨の中を二王門から走り去ってしまったと言うことである。彼の志は神々しんたしいまでに高く、常人の心ではめつたに抱くことができないものである。それは、人生は有限であって遅からず自分も死ななくてはならないことへの諦念と、その mortal な人間の immortal な知識への深い愛情に根ざしているものである。

この「訳」は、一二年に仁和寺で実際に行われた孔雀法経を舞台だと設定して書いた。登蓮法師のエピソードの核心とも言える「人の命は雨の晴れ間をも待つものかは」については、同じような言葉を重ねて分かりやすいものにした。生徒たちは登蓮法師の生き急ぐ姿勢を感じてくれたようではあるが、ストーリー性の豊かな「宇治拾遺物語」に比べると反響は小さかった。また、傍線部について本文と読み比べて古語の意味などを確認させる指示を怠ってしまったことが大きな反省点である。

時間が前後するが、本年度の一学期には西春高校の一年生に対して、「宇治拾遺物語」のあとで、「伊勢物語」から「東下り」の章段を指導した。折句が使われた歌を含むこの章段の学習の後、私自身が折句の手法を使って作った俳句とその背景について綴った文章を

示した。文章そのものは、二〇〇六（平成十八）年度に作成し、当時勤務していた愛知県立美和高校の二年生に配布したものである。そのときには印刷して配布しただけなので生徒の反応は全くなかった。今年度は授業中に読み上げたので、折句が古典文学の中だけでなく現代でも使える技法であることを理解しえた生徒が多かったように感じられた。その文章は、アヤカという、私の亡くなった従姉妹の中学生になった娘にあてて書いた文章に、前置きとして生徒向けの解説を加えたものである。一部を掲げる。

驚きが少し落ち着いた先日の四十九日の法要の日に、私は彼女に、次のような句と文章をホテルの便箋に書き付けて渡しました。和歌の贈答の伝統に則<sup>のま</sup>って、小さなあじさいの花も付けました。皆さんにも紹介します。

俳句の形式による短歌

### 紫陽花は 約束の日に 輝けり

〈中略〉

そして紫陽花の咲く今日もまた、君に会うことができた。先日から始まった、君との十年ぶりの再会は、遠い日の約束だったのだらう。幼児の君は、すっかり少女になっていた。紫陽花のように美しく輝いて。

これが、この句の本当の意味だ。「紫陽花」は花だけのことでなく、君のことでもある。これは短歌の修辞法である「見立て」という技法である。喩えの一種である。この句の初めに「俳句

の形式による短歌」と書いたのも、短歌の技法を使っているからである。さらにこの句は、俳句と言うより短歌に近い内容を持っていると私は思っている。俳句と短歌は、同じ短詩型文学であるが、根本的に異なる芸術ではないかと私は思っている。はっきりとは分らないが、俳句がある一瞬を切り取って読者にその断面を提示するのに対し、短歌のほうは、恋歌などの例のように、もっと物語的だ。この句は、この物語性を持っているから、俳句と言うよりも短歌だと私は思っている。しかし、「俳句の形式による」と書いたように、俳句の形式も踏まえている。「紫陽花」という夏の季語も使っているし、終わりの「けり」も切れ字のようだが（正しくはそうではないのだが）。このように、俳句の形式を用いながらも、技法や物語性は短歌のものだ。その最大の技法は「見立て」ではない。「折句」である。五七五の最初の一字ずつを拾って、三文字続けてみると、この句の暗号は見事に解ける。若い頃から啄木の影響を受け、短歌を少なからず作ってきた私が、今日は俳句という形式を選ばねばならなかったわけも理解してもらえるだろう。

古文指導の中で、「訳」を含むこういった文章を読ませながらねらったことに、おおげさな言い方だが「進歩史観の否定」がある。古文の中の世界など、明るく快適な現代とかけ離れたカビくさい大昔の話であると考えていると、古文を共感的に読むことはできないと考えている。「訳」の中に英単語を盛り込んだりルビにカタカナを用いたり物理の公式を書き込んだりしながら、古文の世界の地面

と現代の私たちの地面とがつながっていることを感じさせることを願った。このような考えに基づいて、書き下ろし補助学習材の作成・活用とは別に、「師読によるアニメーション効果」ということを漠然と考え、模索している。「師読」とは私の造語で、「指導者が自分の解釈を自分の読み声に乗せて作品を音読すること」である。そのことよって、数百年も前に書かれた文章に生命(アニメ)を吹き込むことがアニメーション効果であると思っている。教室で私が音読する際にも、生徒の脳裏に生き生きとしたドラマが浮かぶように、十分練習してから教室に向かっている。これは現代文の授業でも同じである。

西春高校の一年生を対象とした授業はまだ一年もたっていないが、生徒の基礎学力の高さにも助けられながら、今のところ「古文嫌い」の生徒を作らずにすんでいるように感じられる。

#### 四、作文教育の実践の中で

二〇〇八(平成二十)年度、津島東高校の二年生の生徒を引率し、沖縄に修学旅行に出かけた。その翌日、ホームルーム活動の中で作文を書かせたときに印刷して示した文章例の一部を掲載する。

##### 文章の例3

トリプルオーニエート

宇宙世紀0008、修学旅行の引率で首里城を訪れた東海地方のT東高校のC教諭は、首里城正殿の深紅の玉座と向かい合ったとたん、自分のルーツと使命に「覚醒」。引率責任者の教頭に

即刻辞表を提出し、琉球王国皇帝尚志王として即位した。いわゆる第三尚氏王統の始まりである。その後稀代の詐欺師としての口八丁ぶりを縦横に活用して人々を扇動、日本国政府に対し、主権の承認と高校「日本史」教科書への琉球史の正しい位置づけを求めて独立戦争を挑んだが、日米二か国軍にあっけなく鎮圧された。これが今日で言う「ひるます事変」である。その後の尚志王とC教諭の消息は杳として不明である。パイレーツ・オブ・アラビアンのの頭目になったとかルウム戦役で五隻の戦艦を沈めたとか言われていたが、蓋し、義経が中国大陸に渡ってチンギス・ハーンになったというような、後世の作り話であろう。世間が彼のことをすっかり忘れてしまったころ、那覇バスの元バスガイドM・三千代さん(白寿を目前にして昨秋天寿を全うされた)の遺品の中から彼の手紙の一部が発見された。内容から推察するに、彼が首里城で「覚醒」する前夜に書かれたものと思われる。歴史を騒がす以前の、ごく平凡な教員だった彼の横顔プロフィールを知る貴重な史料と思われるので、M・三千代さんのご遺族の了承をいただいで公表させていただくことにした。なお、手紙の後半部分は消失していることと、公表にあたり表現をやや修正したことをおことわりしておく。

拝啓

空梅雨とはいえ、沖縄も本州と同じように蒸し暑い日々ですね。

(中略)

この琉球舞踊を観終わって、どうして今回の旅行には、修学旅



行でのイヴェントにありがちな「子ども騙し」が皆無で、次から次へと本物が出てくるのか、実に不思議でした。この琉球舞踊も日々の厳しい修業に支えられたまさに生きた芸術品でしたし、昨日沖繩戦の体験を話してくださった方も63年前に実際に地獄をかいくぐってこられた方でした。そしてガイドさんご自身が、県外からの来訪者に沖繩の心を伝えたいと強く思っていらいっしょにすることが胸に響きました。修学旅行や遠足などで今までにも多くのガイドさんにお世話になりましたが、今回ほどガイドさんご自身が自分の気持ちを熱く語ってくださったことは初めてです。今でも沖繩で「なな・さん・まる」と呼ばれている、七月三十日午前六時に突然車が道路の左を走り、歩行者は右側を歩くようになり、それまで逆の生活をしていた沖繩県民は大いにとまどったというエピソードや、嘉手納基地を指さしながら、この巨大な基地の住所はカリフォルニア州で、光熱費などは全額日本国民の税金でまかなわれているというお話、今走っているこの道路の下にも不発弾が残っており、沖繩全土から不発弾をすべて撤去するには今後六十年はかかるというお話からは、沖繩の現状に対するガイドさんご自身の悲憤が感じられました。給料を得るためのビジネスにとどまらず、何か使命感のようなものを背負って案内してくださるお姿は、生徒の胸にも届いたこととあります。

こんな素晴らしいガイドさんに、私の個人的な気持ちをお伝えしたいと思ひ、今日はこの手紙を

(手紙はここで、残りを破られたように終わっている。C教諭が破ったのか、M三千代さんが破ったのかは分からないが、無残

な破れ方に、激しい感情が読み取れる。)

この手紙が物語るように、このころのC教諭は、ごくごく常識的な人物であった。そんな彼が生前(というよりも「覚醒」＝発狂の前に)愛唱していた石川啄木の詩をここに書き留め、尚志王を僭称する(自分の身分より高い称号を勝手に名乗ること)前のCの素顔への墓碑銘としたい。

剽ひょうかん軽けいの性さがなりし友の 死に顔の 青き疲れが 今も目にあり

三日間の旅程であったので、その一日ずつの出来事についてそれぞれに異なるスタイルで文章例を書いて示した。けれども、ここに掲げたものなどがそうであるように、生徒たちが常識的に考えている「作文」の文章とはあまりに異なっていたため、生徒は私の文章例に触発されることもまねることもなかった。この実践は、これらの文章例を「修学の作文を書くための手びき」プリントとともに印刷して配布しただけなので、提示する方法などを反省する機会になつた。(後の記・第52回広島大学国語教育学会での質疑応答の中で、この文章例と一緒に生徒に配布した「手びき」で指示した書き方に従ってできあがる文章と、この文章例との間の大きな乖離について指摘していただいた。「手びき」などの書き方指導と補充し合う文章例を作製する必要を思い知ることができた。)文章を書くことを楽しめる、楽しみながら文章を書くという経験をさせたくてこのようなものを書いたのだが、今後は反省点を改善して次回に役立

てたいと思っている。

## 五、実践の反省と今後の展望

### (1) 得られたもの

本年度一学期「国語総合」（古典分野）では、「児のそら寝」（「宇治拾遺物語」）、「検非違使忠明のこと」（「宇治拾遺物語」）、「芥川」（「伊勢物語」）、「東下り」（「伊勢物語」）をこの順で扱った。前述のように「児のそら寝」と「検非違使忠明のこと」については「訳」を提示したが、「芥川」ではそれが作成できなかった。すると生徒からは「訳」はないのかという催促を受けた。おもしろがって読んでくれている様子に、生徒を学習へ誘うために「書き下ろし補助学習材」は有効であったと感じられた。たとえ名文でなくても目の前の教師（「私の先生」）が自らの肉を裂き血で書いたような文章には、既製品の学習材とは違う「力」があるのだろう。けれども、その「力」を発動させるには、学習者の興味・関心、知的レヴェルの見極めとそれに合わせた活用方法のくふうが必要である。

### (2) 残されたもの

どの「書き下ろし補助学習材」も行き当たりばったりで作成して提示したもののばかりである。こういった文章を用いた学習を学習指導計画の中にどう位置づけ、どういう方法で活用し、どういう学習活動を組織するのかを見通した系統的な指導計画を考えてから補助学習材を作成し実践を始めることが必要である。そうした授業が展開できるようになることを目指しつつも、まだそこまでの力量のな

い私としては、補助学習材について、「何をどう書くか」とともに「どのように生徒に示し、どう活用するか」を考えるとところから、次の一歩を踏み出していきたい。

【お願い】紙幅の関係で「書き下ろし補助学習材」の全文を掲載できませんでした。ご請求くださるとうれしいです。

（愛知県立西春高等学校）